

ノ御門の前に置かれた建物、及びその場所。大橋を渡って登城する者は、此処で下馬して馬を繋ぎ、或は駕籠から下乗して此処に駕籠を置いた。

資料 仙台市史第1、3巻

藩政時代に於ける仙台の御米蔵（練生川信次。仙台郷土研究第7巻5-6号）

40. 「じゅうねん」を漢字でどう書くのか

問 「じゅうねん」を漢字でどう書くのですか。

答 「じゅうねん」は、荏胡麻〔えごま⁽¹⁾〕の方言です。「仙台方言考」(真山青果)⁽²⁾に『じゅうねん 荏胡摩の種をいう。荏胡麻はその茎など紫蘇に似て青く、その花は白し、故に白紫蘇ともいふ。この子より搾りたる油を市場にては荏油とも荏水ともいふ。その子を「じゅうねん」と云ひ麻の実に似たり。小島の餌に用ふ。』と、「全国方言辞典」(東条操編)に『じゅうね 荏。えごま 常陸・青森・岩手・宮城県栗原郡』と、また「日本国語大辞典」(小学館)に『じゅうねん 植物「えごま(荏胡麻)」の異名。じゅうねん仙台・じゅうねあぶら南部。(方言)秋田県一部・宮城県・福島県南会津郡』とあります。ところで、この方言「じゅうねん」は仮名書きで通用し、これを漢字で表記した実例は見当りません。

じゅうねんは、昔から灯火用・食用・塗布用(雨傘・合羽・提灯などの防水)油として用途が広く、また胡麻のように食料としても用いられたので、地力のない下畑や麦作の畝間に、かなり栽培されてきたものです。そして、備蓄用として十年も保存に堪えるので、「十年」=「じゅうねん⁽³⁾」の名が出、従って「十年」と書くという説も、ごく一部にはありますが、両者は語呂が合うというだけで、信頼度が十分かどうかわかりません。

注(1) 「大和本草」(貝原益軒、白井光太郎考証)に『荏^エ〔和名〕エゴマ〔学名〕*Perilla frutescence* Brit. var. *typica* Makino.

本草綱目紫蘇ノ集解ニ時珍曰其面背皆白キ者即白蘇乃荏也故本草ノ目錄ニアリテ後ハ荏ヲシルサス油ヲトリテ雨衣ニスル是紫蘇ノ類也国俗荏ノ油ヲ桐油ト云誤ナリ』

「牧野新日本植物図鑑」(牧野富太郎著、前川文夫・原寛・津山尚改訂)に『えごま〔しそ科〕*Perilla frutescens* Britton var. *japonica* Hara 東南アジア原産の一年草で、我が国でも広く栽培されまた野性化している。茎は四角形で直立分枝し、高さ60~90 cm位で立った白毛がある。全体に特有の不快な臭気がある。葉は対生し、長い柄があり、卵円形で長さ7~12 cm、幅5~8 cm先はとがり、ふちにはきょ歯がある。

葉は普通緑色で時に裏面が淡紫色をおびることがある。夏から秋にかけて、枝先に総状の花穂をだし、白色の小さな唇形花を密につける。がくは長さ3～4 mm、上唇はやや短かく3裂、下唇は長く2裂し、長い軟毛がある。花冠は長さ4～5 mm、下唇はやや大きい。雄しべ4本のうち2本は長い、4個の分果は永存性のがくの底にある。〔日本名〕荏胡麻の意味である。〔漢名〕荏〔じん〕といい、果実からしぼった油は荏油という。』とある。

注(2) p. 135 の注(2)参照。

注(3) 「農業図説」(土屋又三郎、享保2〔1717〕)の中の「荏種時」の「解説」(清水隆久)に『「耕稼春秋」によると、えごまは四月ころ、条件のよくないやせた畑を耕して播くか、あるいは小麦や大麦畑の中に播くかする。畑をうち起こし、細いうねをつくって播くが、加賀ではあまり作らない、越中や能登ではたくさん作って油を搾るという、と述べられている。絵の上のほうの人物は、いわゆる下畑を耕しているところで、手前の人物はそのあと細いうねを立てて、えごまの種子を蒔いているのである。左手に小箱を持ち、右手の指先でつまみ播きをしている。農道に置いてあるのは元肥用の下肥である。新緑の候になり柳の枝のみずみずしい若葉がゆれている。』と書かれている。

資料 仙台方言考(真山青果)

全国方言辞典(東条 操編)

日本国語大辞典(小学館編)